

論文

江沅『説文解字音均表』の続経解本と清稿本における 諧声符の配列

——蘇州図書館蔵本を新たな資料として——

白田真佐子

摘要

段玉裁（1735-1815）の学生江沅（1767-1838）著《说文解字音均表》一书，此书是对清代《说文解字》研究来说很有益的，我本人作为清代古音谐声表研究对《说文解字音均表》多年来进行研究。《说文解字音均表》的主要版本有两种，即《皇清经解续编》本（简称续经解本）和清稿本（台湾・国家图书馆藏），其差异就是排列谐声符的方法。本文以《说文解字音均表》苏州图书馆藏本为新的资料对续经解本进行了研究。《说文解字音均表》清稿本的排列基本上是按照《说文解字》的，这是《说文解字音均表》的本来面目。通过本文的研究，我们可以了解，续经解本是江沅的学生雷浚（1814-1893）以苏州图书馆藏本为底本，将谐声符基本上按照段玉裁《古十七部谐声表》重新排列了。我们可以说《说文解字音均表》苏州图书馆藏本的原作者为江沅，校订者为雷浚。

关键词：江沅；《说文解字音均表》；续经解本；清稿本；苏州图书馆藏本；谐声符；排列；清代古音谐声表；段玉裁；雷浚

1. はじめに

江沅（字は子蘭・伯蘭，江蘇呉県の人，1767-1838）『説文解字音均表』は清代の『説文解字』研究全般，特に，江氏の師である段玉裁（字は若庸，江蘇金壇の人，1735-1815）『説文解字』研究には役立つ書物である（以下、『説文解字』を単に『説文』と言うこともある）。筆者は『説文解字音均表』を清代古音諧声表研究の面から研究している。その『説文解字音均表』のテキストとして，主なものは2種あり¹⁾，それは『皇清経解続編』本（本稿では続

経解本と主に呼ぶ)と清稿本(台湾・国家図書館蔵)であるが、この2種は諧声符の配列が異なる。頼・説文会1983(120-121頁)は、統経解本と清稿本の体裁で、同じでない点について、「清稿本は目次がついている他、いわゆる「初声」、つまり発展して行く諧声の一番始めの諧声ごとに、一まとめにして書いてあります。そして、その説文出現順です。」と答え、統経解本については「統経解本は、いわば一篆一行本的な体裁を採っています。これは大変便利な点です。そして、大体、段玉裁の諧声表の順になっています。」と述べる。

このように、『説文解字音均表』には諧声符の配列の異なる2種が存在するので、『説文解字音均表』本来の配列について、本稿では明らかにしたい。『説文解字音均表』2種を比較し、校訂したものは説文会1994(『江沅説文解字音均表攷正』)である。(諧声符の配列については詳細な記述はない。)まず、その校訂の成果について述べ、本稿の目的に沿って論を進めていくことにする。『説文解字音均表』のテキストについては、統経解本・清稿本のほかに、上海図書館蔵本と北京大学図書館蔵本があり、筆者も以前論文で述べたことがある。本稿では蘇州図書館蔵『説文解字音均表』を新たな資料として用いる。

なお、古音第X部のXには基本的に算用数字を用いるが、引用文等で漢数字を用いることもあり、特に統一しないことにする。その他、原文が漢数字の場合が多いが、その他の部分では適宜算用数字を用いる。

2. 『江沅説文解字音均表攷正』による比較

説文会1994編纂の趣旨については、その冒頭の頼惟勤「『江沅説文解字音均表攷正』序」に詳しい。その頼氏序文の後に凡例があり、『説文解字音均表』統経解本を底本として、清稿本と照合して校勘したことが記されている。「凡例三、I」には「『音均表』の底本には復興書局『皇清経解統編』(一九七二年刊、台北)所収『説文解字音均表』を用いた。」とある。「凡例五、II」には「底本を文海出版社『清代稿本百種彙刊』(一九七四年刊、台北)所収本(以下『稿本』と略す)によって校勘し、以下のように処理した。」とあり、(1)から(3)までの3条が見える。

そのうち、(1)と(2)は次の通りである。(1)「底本ではしばしば「～音」の掲出を脱しているので、『稿本』によって校正した。」(以下省略) (2)「底本では左記の文字が脱落しているので、それぞれ〈 〉で囲んで書き加え、番号と記号を記した。」(1)の例をここで補えば、第2部の祭音という諧声符は記されているが、二声に当たる擦音の表示が脱落している。説文会1994はそれぞれ0097A、0997Bと番号を振っている。(2)で「左記」というのは原文が縦書きのためである。脱落の例は5文字あり、それは「遘・蘄・畚・稟・頼」である²⁾。本稿では(2)の特殊な例については省略するが、以上引用した(1)と(2)から、

底本、つまり統経解本には脱落があることがわかる。逆に、統経解本が字句を訂正している箇所もあるが、その数は多くない。例えば、それは説文会1994、「凡例五、II(3)」で指摘するもので、次の通りである。「稿本では0852A 献6058について、目次では十三部にあり、本文では十二部にある。今、底本に従い、十三部に入れて番号をつけた。」底本とは統経解本を指し、これによって清稿本を正している。0852Aは諧声符の番号で、Aは初声を示し、6058は大徐本の番号である。

なお、説文会1994は『説文解字音均表』統経本と清稿本のみならず、さらに『説文解字』大徐本の親字とも照合してある。その結果、巻末の「両見リスト」等の表に載せるべき例が現れたと言える。「両見リスト」について言えば、最初の例は「0002元 14部0902B 15部1115A」である。『説文解字』「元」(一篇上)の字が『説文解字音均表』の第14部と第15部に重複している。0002は『説文解字』大徐本の番号で、0902、1115は諧声符の番号で、Aは初声、Bは二声を表わす(本稿第3節のA、Bはこれとは異なる)。本稿では、「両見リスト」について詳述しないことにする³⁾。

3. 『説文解字音均表』の最初の諧声符と文字(「玼」と「絲」)

清稿本・第1部は^フ「玼音」の「玼」(『説文』一篇上の珣が部首)で、統経解本・第1部は「絲音」の「絲」(『説文』七篇上部首)でそれぞれ始まる。これは清稿本と統経解本とで諧声符の配列が異なることを端的に示す。黄1996(3-4頁)はすでに清稿本の「玼」と統経解本の「絲」を比較しており、統経解本の欠点を考慮し、論文では清稿本の「玼」を中心に述べている⁴⁾。本稿では清稿本の「玼」と統経解本の「絲」を新たに比較して、表を掲げるが、A・B・Cはそれぞれ次の通りで、A・Bについては日本語訳を原文の直後に記す⁵⁾。

A：江沅が引用する段玉裁『説文解字注』の「玼・絲」。

B：江沅の注の「玼・絲」。

C：江沅『説文解字音均表』の凡例に相当する部分。

	清稿本 玼	統経解本 絲
A	玼 一篇上 珣部 車笞間皮匱也。古者使奉王 ⁶⁾ ，所以盛之。从車珣，讀与服同。 車笞の間にある皮の匱である。古は使者が玉を奉る時に、これに積んだ ⁸⁾ 。車珣に従い、服と同じに読む。	絲 十三篇上 部首 蚕所吐也。从二糸。凡絲之属皆从絲 ⁷⁾ 。 蚕が吐くものである。二糸に従う。凡そ絲の属はみな絲に従う。

B	<p>段氏依『玉篇』訂説解⁹⁾。漢時於輕車以置弩，与古異用，故申之。服字在一部，故列此。</p> <p>段氏は『玉篇』によって説解を訂正した。漢代，輕車には弩を置き，古とは異なって用いたので，述べた。服の字は（古音）第一部にあるので，（璫の字も）ここ（古音第一部）に並べる¹⁰⁾。</p>	<p>糸為象形之字，而絲从二糸，象其二束也。引申為髡豪絲忽之数，数之散者也。</p> <p>糸は象形文字で，絲は二糸に从い，その二束に象るのである。引申して髡豪絲忽の数とし，数の微かなものである。</p>
---	--	--

Cについては清稿本の原文について，C-1からC-4まで分ける。続経解本にはC-2の部分がないので，清稿本を中心にして，異同を見るのがよいからである。訳文は表の後に示すことにする。

	清稿本 璫	続経解本 絲
C	<p>C-1段氏謂古無去声，唯平上入三耳。今依段氏十七部韻分編，許書易形次者，而為声次。</p> <p>C-2段氏編『詩』及群經韻分平上入三声，此書以字系聯一字，所属三声，具有不可復分，故建首之字俱就許書次第，而不分三声，其下生声之字，亦依前後次之。</p> <p>C-3有声復生声者，亦敘其次，別為首，退於下列之。有展駟駢生者，亦勿使断，必畢而後及其次（者）¹¹⁾。有不為声所生，而復不生声者，但以之建首如此，璫字是也。</p> <p>C-4有説解云得声，而不在此部者，仍列而論之。其会意而非得声者不列。發凡於此。</p>	<p>段氏謂古無去声，唯平上入三耳。今依段氏十七部韻分編，易形次者，而為声次。</p> <p>声復生声，亦敘其次，別為首列之。有展駟駢生者，亦勿使断，必畢而後及其次。有不為声所生，亦不生声者，但以之建首。</p> <p>有説解云得声，而不在此部者，仍列而論之。其会意而非得声者不列。發凡於此。</p>

C-1段氏は古は去声がなく，ただ平上入の三声調があったと謂う。今，段氏の十七部の韻分によって編列し，許書（『説文解字』）の字形の順を発音の順に易えた。

C-2段氏は『詩経』及び群經の韻分を平上入の三声調に編列した。この書（『説文解字音均表』）は字を字と系聯し，三声調への所属はまた分けることをしない。建首¹²⁾の字は許書（『説文解字』）の順序によるが，三声調には分けず，その下にまた諧声符がある時も，前後と続いていく。

C-3諧声符がまた諧声符を生じるなら，その二声も順序づけ，別に諧声符を立て，以下に配列する。展駟駢生するものは分断してはならず，（初声）が終わった後に二声がつらなる。諧声符（初声）から派生することがなく，二声を生じないのであれば，ただ建首のみを置くのは，璫の字の如くである。

C-4説解に「得声」（某声。形声文字）とあっても，この部にはないものも，やはり列挙して論じる¹³⁾。会意で「得声」でないものは列挙しない。これを凡例とする。

以上がCの部分の日本語訳である。この日本語訳も参考にしながら、「𦉳」と「絲」の注釈の分量を比べると「絲」、つまり統経解本のほうが短い。前述したように、それはC-2において顕著であり、統経解本にはない部分である。C-3については、清稿本と統経解本はおおむね一致するが、「𦉳字是也」の部分が統経解本にはない。それは統経解本が「絲」から始まるからで、「𦉳字是也」が削除されたのは頷ける。

4. 『説文解字音均表』統経解本への雷浚の関与

『説文解字音均表』統経解本の編纂に関して、江沅の弟子である雷浚（字は深之，江蘇呉県の人，1814-1893）が関与していることを本節では述べるが，その前に，白田2016でも取り上げた雷浚「『説文解字音均表』跋」について，再度検討したい。

4.1 雷浚「『説文解字音均表』跋」

雷浚「『説文解字音均表』跋」は統経解本ではなく『乃有廬雜著』に見える。この跋からわかることは，王先謙（『皇清経解統編』の編纂者。字は益吾，湖南長沙の人，1842-1917）が許榘（字は叔夏，浙江海寧の人，1787-1862）の遺族から『説文解字音均表』の副本を入手し，それを『皇清経解統編』に入れるに当たって，雷浚に校讎を委託し，案語も付けてよいと許可したことである。原文は以下の通りである（日本語訳は白田2016，28頁による）。

先是先師書成時，海寧許觀察榘写一副本去。至是海寧亦没於賊，觀察卒。許氏避兵去江北，副本存亡未可知也。光緒乙酉国子監祭酒長沙王公奉命視学来江蘇，展転得副本於許氏。後人刻入『皇清経解統編』，知浚為江門老弟子，委以校讎，且許浚遇有疑義可以自案語。

以前先師が脱稿した時，海寧の許榘（字は叔夏，浙江海寧の人，1787-1862）觀察が副本を書いて行った。その後，海寧も賊に屈し，許觀察も亡くなった（1862）。許家の人は兵を避けて江北に行き，副本の存亡もわからなくなったのである。光緒乙酉（1885）国子監祭酒長沙王公（王先謙，字は益吾，湖南長沙の人，1842-1917）が視学の命を受け江蘇に来訪し，展転として許家のから副本を入手した。後人は『皇清経解統編』に入れ，浚が江門の老弟子であることを知ると，校讎を委託し，かつ疑義があれば案語をつけてよいと浚に許可した。

引用文中に「校讎」と見え，ここでは校勘と言い換えてもよいと思うが，それは誤字脱字等の修正や補正が主要な内容ではないか。ただし，それを越える仕事をしていたことは本稿4.2節で述べる。

ここで，雷浚が「『説文解字音均表』跋」で言う『説文解字音均表』副本とは何かについ

て、補足したい。1830-1831年（雷浚16-17歳）、雷浚は江沅の門下生となる。江氏はちょうど『説文解字音均表』の草稿を書いている、この書物を直接浚に伝授した。江沅は書物を書き上げると、すぐに亡くなった（1838年）。その後、稿本や草稿の所在が危うくなった。江沅が脱稿したとき、許槿が副本を書いている、許槿の死後も許家に残っていて、これが『説文解字音均表』続経解本の底本となったのである¹⁴⁾。雷浚の述べるところによれば、副本は江沅の稿本を許槿が筆写したものだだろう。本稿第5節で蘇州図書館蔵『説文解字音均表』について述べるが、この書物を閲覧した結果を先に述べれば、副本とは『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本である。ただ、清稿本と蘇州図書館蔵本を比較してみると、細かい筆跡の違いはさておき、全体的に類似しており、蘇州図書館蔵本についても基本的に江沅が書いたものと思われる。

4.2 続経解本の校勘・案語と雷浚

続経解本の各巻末には「呉県雷浚、武進費念慈校」（呉県の雷浚、武進の費念慈校）とあり、原文は縦書きなので雷浚が先に来ている。費念慈（字は配懐、江蘇武進の人、1855-1905）¹⁵⁾である。著書には詩集『帰牧集』一卷等がある。

虞2005（12頁）によれば、『皇清経解続編』の校勘は『皇清経解』のそれより精密になり、各巻二人で初校・再校を行った¹⁶⁾。『説文解字音均表』は続経解本の巻680から巻697までを占め、全十八巻ある。虞2005（13頁）の姓名・初校巻数・再校巻数の対照表によると、雷浚¹⁷⁾の初校巻数は十八、費念慈の再校巻数は十八で、『説文解字音均表』の巻数十八と合致する。『説文解字音均表』は全十七部で十七巻であるが、巻首を一巻と数えると十八巻となる。雷浚、費念慈はそれぞれ『説文解字音均表』の初校、再校を担当したことになる。費念慈は再校ということで、おそらく文字通り校正をしたのではないか。雷浚はそれ以外の仕事もしており、雷氏の『説文解字音均表』への関与は校正に止まらないことを以下に論じていきたい。

雷浚は「『説文解字音均表』跋」を書いているが、この跋について詳細は白田2006（27頁）で説明し、必要箇所は日本語に訳した。以下、雷浚の跋についての説明を白田2006（27頁）から引用する。

江沅の弟子である雷浚（字は深之、江蘇呉県の人、1814-1893）が「『説文解字音均表』跋」を書いている、丁亥（1887）という日付がある。この跋によると、雷浚が『説文解字音均表』の刊行に関わっていたことが読み取れる。『皇清経解続編』の刊行年について、虞2005（10頁）は「光緒十二至十四年（一八八六—一八八八）」と言う。雷浚の跋に記された丁亥（1887）は、ほぼ『皇清経解続編』の刊行年（1886-1888）にあたる。但し、『説文解字音均表』の『皇清経解続編』本には見えず、雷浚の文集『乃有廬雜著』

に収められている。

『説文解字音均表』続経解本の末尾には「浚案」で始まる雷浚の案語がある。その最初に次のようにある。

浚案十七部分自段氏，先師本段氏十七部，先箸『説文釈例』，後成是編。段氏亦先成『六書音均表』，後成『説文解字注』。学与年進，不無大同小異。

私浚が案ずるに（古音）十七部は段氏から分かれ，先師（江沅）は段氏十七部にに基づき，まず『説文釈例』（「釈字例」と「釈音例」からなる）を著わし，後に本編（『説文解字音均表』）ができた。段氏もまず『六書音均表』を書き，その後で『説文解字注』を書いた。学問は年とともに進み，大同小異がないことはない。

そして，段玉裁「古十七部諧声表」・江沅『説文釈例・釈音例』・『説文解字音均表』の諧声符を比較した結果を2組挙げている。本稿では紙幅の関係で，江沅が問題点を指摘した部分のみ引用することにした。

段表第一部有茲声，又有兹声，先師『釈例』亦然。是編第一部有茲声，無兹声，兹声在十二部，何也。

段氏表（「古十七部諧声表」）第一部に茲声があり，兹声もあり，先師（江沅）の『説文釈例・釈音例』もそうである。この『説文解字音均表』第一部に茲声はあるが，兹声はなく，兹声が第十二部にあるのは何故か。

段表第十七部無妥声，十五部有綏声，『釈例』十七部有妥声，十五部有綏声。是編妥声・綏声同在十五部，何也。

段表（「古十七部諧声表」）第十七部に妥声がなく，第十五部に綏声があり，『説文釈例・釈音例』第十七部に妥声があり，第十五部に綏声がある。この『説文解字音均表』では妥声・綏声ともに第十五部にあるのは何故か。

雷浚は第1部・第12部の例を最初の例とし，第15部・第17部の例を最後の例として，以上の2組の例を挙げ，最後に以下のように締めくくる。

先師本段氏十七部述為是編，而每部某声・某声不尽与段表同，亦不尽与『釈例』同，先師不自言其所以然。読者不能無疑，故略举首尾疏之如此。余可類推。

先師は段氏の十七部に基づいて，この『説文解字音均表』を述作したが，各部の某声・某声は段氏の表と全部同じとも限らず，『説文釈例・釈音例』とも全部同じとは限らず，先師はその理由を言わなかった。読む者は疑わないことができないので，最初と最後を少し挙げて，このように述べる。残りは類推できる。

以上の「浚案」や『説文解字音均表』跋から，『説文解字音均表』続経解本の校勘について，主な仕事は雷浚であったと考えられる。

5. 『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本

蘇州図書館の古籍目録（江蘇省蘇州図書館古籍普查登記目録編委会2016, 161頁）には「説文解字音韻表十七卷（清）江沅編 清抄本 十冊」とある。善本ではなく普通古籍であり、筆者もその存在に気づきにくかった¹⁸⁾。実際閲覧してみると、続経解本の雷浚による案語、雷浚『説文解字音均表』跋に記されている許槿、この二点は『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本に具体的に見える。但し、諧声符の配列は『説文解字』の順であり、続経解本とは異なる。以下、『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本の体裁について述べ、雷浚による案語、許槿の『説文解字音均表』への書入れ等を明らかにしたい。

5.1 体裁と雷浚・費念慈等による初校・覆校

蘇州図書館蔵本全巻を概観したところ、清稿本と類似していた。今回、清稿本（影印本）と特に詳細に突き合わせをした箇所は、第1冊について、冒頭の段玉裁『説文解字音均表』序から第1部3aまでである（葉数の表はa、裏はbと示す）。

清稿本と蘇州図書館蔵本の最大の違いは、前者には目次にあたる表目があるが、後者には見られないことである。蘇州図書館には『江氏説文解字音韻表目』一卷があり、古籍目録（江蘇省蘇州図書館古籍普查登記目録編委会2016, 166頁）には「（清）□□編 清抄本 一冊」とあって、著者が明らかでないが、清稿本の表目と体裁と筆跡が類似しており、筆写した者についてはさておき、『江氏説文解字音韻表目』の著者は江沅であると言ってよい。

清稿本については国家図書館特蔵部1996（252頁）に次のようにある。

【説文解字音均表十七卷目録一卷八冊】

「每半葉十行，行二十四字，小字双行，字数同。版心中間記部次，下方記葉数。」

蘇州図書館蔵本も「每半葉十行，行二十四字，小字双行，字数同。」である。清稿本にも付箋が付いており、蘇州図書館蔵本についても付箋が付いているが、同一か否か、全部について確認することは時間等の関係でできなかった。

表紙は黄土色の紙の上に、後から付けたと推定される青色の紙がある。黄土色の表紙に、例えば第2冊であれば「雷浚校 費念慈覆校」と記されている。なお、表紙の色については褪色していると思われる。全10冊の主な内容と初校と覆校を行った者を表にまとめる前に、第1冊「巻首に相当する部分」について略述する。この部分は次の三部分からなる。①段玉裁『説文解字音均表』序 ②「弁言」（「戴編修震」で始まり、江沅が他の学者の説の引用。途中で筆跡が違うような趣がある。）③「附」（第1条は「蒼頡」で始まり、江沅が自分の考えを記す全13条。）

冊	主な内容	初校	覆校
1	巻首に相当する部分 『説文解字音均表』第1部	(記載なし)	(記載なし)
2	『説文解字音均表』第2部・第3部	雷浚	費念慈
3	『説文解字音均表』第4部・第5部	雷浚	費念慈
4	『説文解字音均表』第6部～第8部	雷浚	費念慈
5	『説文解字音均表』第9部～第11部	査燕緒	雷浚
6	『説文解字音均表』第12部・第13部	査燕緒	費念慈
7	『説文解字音均表』第14部	査燕緒	費念慈
8	『説文解字音均表』第15部	雷浚	費念慈
9	『説文解字音均表』第15部下	雷浚	費念慈
10	『説文解字音均表』第16部・第17部・説文解字闕音諸字	費念慈	(記載なし)

統経解本では初校と覆校はそれぞれ雷浚、費念慈に固定しているが、蘇州図書館蔵本では一定していない。また、記載がないこともあり、査燕緒（字は翼甫、浙江海寧の人、1843-1917）という人物も加わっている。

5.2 雷浚による書入れ・案語

蘇州図書館蔵本には「浚案」という雷浚の書入れがある。余白に記している場合と、付箋に記している場合とがある。紙幅の関係で、ここでは付箋の一例として、「愴」（第10部、9a、倉音）の「浚案」のみ取り上げる。そこには「浚案愴本訓傷也先師云此当作傷也句中疑有奪訛」と記され、統経解本の「愴」（第10部、21b、倉音）にも同じ文が見える。統経解本「愴」の箇所には「愴 十篇下・心部 傷也。从心，倉声。」とあり、それに関する江沅の注は「段氏曰，“愴訓傷，猶創訓傷也。” 浚案此当作傷也。」（段氏が曰うには，“愴は傷と訓み，創を傷と訓むのと同じようなものである。” 私こと沅が案ずるに，これは傷と作るべきである。）となっている。この後に，雷浚の案語が付き，「浚案，愴本訓傷也。先師云，“此当作傷也。” 句中疑有奪訛。」（浚が案ずるに，愴はもともと傷と訓むのであり，先師・江沅が「これは傷に作るべきである。」と仰っているが，句中に誤字脱字があるのではないだろうか。）とある。「愴」は『説文』（段注，十下・45a）に「傷也。」とあり，段玉裁は「愴訓傷，猶創訓傷也。」と述べる。「創」は「刃」の異体字で，「刃」は『説文』（段注，四下・51a）に「傷也。」とある。雷浚の案語によれば，江沅の注には誤字脱字があるようである。

以上のような書入れの他，「浚案」が2葉挟み込まれている。半葉につき，1行25字，全9行のます目に記され，各行の1字目は空格なので，1行につき実質24字である。統経解本の『説文解字音均表』末尾の「浚案」と照合すると，数か所字句の異同があるが，基本的

には一致した。但し、統経解本にない文章が蘇州図書館蔵本の最後にあり、それは江沅の貫籍に関するものである。これは雷浚「『説文解字音均表』跋」の最後にもあるが、白田2016では注21で原文のみ引用しておいた。ここに改めて引用し、蘇州図書館蔵本との異同を記したいが、異同箇所の下線を引き、()内は蘇州図書館蔵本の「浚案」の記載を引用する。この「浚案」には句読点も付いているが、雷浚が自分で付けたかは不明である。その句読点について、以下に引用する場合に全部その通りではないが、参考にはしている。

先師祖父（又案先師祖父）皆籍元和，先師籍吳郡。我郡吳長元三県同城。通考祖孫父子（父子祖孫）異籍者頗多，不為異也。咸豊初江都李氏刻先師遺著『説文積例』（『説文積例』）誤署元和江某，不可以不辨，並辨之。

先師・江沅の祖父（江声，字は叔雲，1721-1799）と父（江謬，字は貢庭，1743-1800）はみな貫籍が元和で，先師は貫籍が吳郡である¹⁹⁾。わが郡²⁰⁾の吳郡・長洲郡・元和郡の三郡は同城である。祖孫父子をあまねく考えると，貫籍が異なるものはかなり多く，奇異なことではない。咸豊の初め，江都の李氏（李祖望，字は賓嶠，江蘇江都の人，1814-1881）が先師の遺著『説文積例』を刊行したが，誤って「元和江某」と署しており²¹⁾，明らかにしない訳にはいかないので，ここで明らかにしたい。

5.3 許槿・許淮祥による書入れ

蘇州図書館蔵本の第1冊に「海甯許槿蔵本」（甯は寧に同じ）という書入れがあり，許槿²²⁾が所蔵していたことを証明している。その箇所は『説文解字音均表』第1冊，「弁言」の1aと第1部の1aであり，どちらも24字×10行で，許槿の書入れを含めると11行となる。下図参照。

第1部 1a	「弁言」 1a
<p> 説文解字音均表 海甯許槿蔵本 姑蘇江沅伯蘭略疏 第一部（韻目省略） （以下省略） </p>	<p> 説文解字音均表 海甯許槿蔵本 姑蘇江沅伯蘭編 弁言 戴編修震六書音均表序曰（以下省略） </p>

また、第10冊、24aに「海甯後學許淮祥校」という書入れがある。許淮祥（原名は誦禾，字は子頌，浙江海寧の人，1841-1923）は許榘の息子である。許榘は1862年に亡くなっており、雷浚は『説文解字音均表』跋において、王先謙が許家の人から『説文解字音均表』副本を1885年に入手したと述べているが、許淮祥が許榘の死後、保管していたことは想像に難くない。

本稿5.1節で言及した『江氏説文解字音韻表目』には許淮祥の蔵書印が見え、やはり許淮祥が保管していたのだろう。ただ、王先謙が『江氏説文解字音韻表目』まで入手したのかどうかは分からない。『説文解字音均表』統経解本には標目にあたる部分はないのである。

5.4 「𪛗音」

『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本で特筆すべき点として、「𪛗音」の部分が切り取られ、別の部分に貼ってあることを指摘したい。「𪛗音」の部分は第13部・20bに付箋という形で貼ってある。書入れには「十二部𪛗字六行当逡在此𪛗字一行之前」とあり、以下に句読点を付け、日本語訳を試みる。

十二部𪛗字六行，当逡在此𪛗字一行之前。

第十二部の𪛗字の六行は，この𪛗の字の一行前に移すべきである。

第12部・21aから21bにかけて、切り取られていて、その部分は「𪛗音」に相当する。清稿本で第12部・21aから21bにかけて見ると、「𪛗音」について21aに1行、21bに5行、合計6行あり、切り取りはない。同じく清稿本で、第13部・20bを見ると、「薦音」と「𪛗音」の間の上に「十二部𪛗字六行当逡在此𪛗字一行之前」とあり、蘇州図書館蔵本の書入れと同一である。蘇州図書館蔵本では、江沅の自注に従って、「𪛗音」の所属を第13部に変更しているのである。これは雷浚が改編したのかもしれない。その証拠に、統経解本では「𪛗音」は第13部にある。

なお、説文会1994、「凡例五、II(3)」で「𪛗」に関する古音の所属の問題について指摘があることは、本稿第2節ですでに述べた。

6. 『説文解字音均表』の本来の配列と統経解本

6.1 『説文解字音均表』本来の配列

『説文解字音均表』という書名からすると、『説文解字』の順に諧声符を配列するのは必然のことと考えられ、これが『説文解字音均表』の本来の体裁と言える。これを裏付けるのは、①台湾・国家図書館蔵本、②北京大学図書館蔵本、③上海図書館蔵本、④蘇州図書館蔵本という4種のテキストが、すべて『説文解字』の順に配列していることである。①は清稿

本で、本稿で論じる対象としている。その原本を2012年に閲覧したところ、出版してもよい状態に見えるが、欄外への書き入れ、付箋の添付も見受けられた。ただ、②の北京大学蔵本よりは完成に近づいている。④はまさに統経解本の底本となったもので、今回初めて取り上げた。

6.2 統経解本の配列

雷浚が目撃したテキストは蘇州図書館蔵『説文解字音均表』で、その配列は『説文解字』の順で、それを整理し直したものが、『皇清経解統編』に収められた。なぜ配列を変えたのか。そのメリットはあると考えられ、次のような頼・説文会1983(120-121頁)の指摘は的確である。文中の「段玉裁の諧声表」とは段玉裁「古十七部諧声表」を指す。

統経解本は、いわば一篆一行本的な体裁を採っています。これは大変便利な点です。そして、大体、段玉裁の諧声表の順になっています。一番始めの諧声表が端的にわかるようになっていない点を除けば、統経解本の方が使いやすいでしょう。誰か統経解本を清稿本でしっかり校正してほしいですね²³⁾。

諧声符の配列を整理し直すには、その仕事に時間がかかるのは避けられない。雷浚の「『説文解字音均表』跋」によれば、1885年に『説文解字音均表』副本を入手したことになり、『皇清経解統編』の刊行は1886-1888年であり(本稿4.1節と4.2節参照)、時間的に無理がある。それでもそれを成し遂げ、『説文解字音均表』の刊行にこぎ着けたに違いない。諧声符の配列を変えるにあたっては、江沅『説文积例・积音例』も元にしてしていると推測できる。それは統経解本末尾の「浚案」で、『説文积例』について言及し、参照した形跡が見えるからである(本稿4.2節参照)。実際、江沅が『説文解字音均表』の前に編纂した『説文积例・积音例』の配列は段玉裁「古十七部諧声表」に近い²⁴⁾。また、文字ごとに改行することが統経解本では行われている。

『説文解字音均表』における第4部末、第9部末の諧声符の配列について、第4部末については白田2002、第9部末については2001ですでに論じたが、ここで要旨に言及すると、説明がしやすいと思う。『説文解字音均表』第4部末、第9部末それぞれに、諧声符と所属字が注なしで並んでいる箇所があり、清稿本、統経解本とも配列のしかたが同じである。元来統経解本と清稿本の配列は異なるのに、第4部末、第9部末において、統経解本の配列が清稿本と同じである。そもそも第4部末、第9部末とは何であるかを説明したい。第4部末にある諧声符は本来第3部入声で、第4部に所属換えすべきものである。第9部末にある諧声符は、第9部を東部と冬部に細分化すると時、冬部として第9部から分離すべきものである。以上のように、統経解本は第4部末、第9部末の諧声符の配列を清稿本と同じく、『説文』の順としており、統経解本の中に2種類の諧声符の配列方法が見えるわけである。蘇州

図書館蔵本を底本にして、統経解本では諧声符の並べ替えを行い、諧声符のみ並んでいる所は手を入れなかったと考えれば、2種類の配列方法が存在することが説明できる。

ところで、蘇州図書館蔵本は江沅による付箋も散見していて、そのまま出版することはできない状態である。雷浚も「浚案」という書入れを直接書き込んだり、付箋を付けたりしている。諧声符の配列を変えたことは、『説文解字音均表』本来の配列とは異なるが、検索のしやすさも目指しており、何よりも刊行して世に広めたことは雷浚の功績である。ただ、配列を変えた時に、諧声符等の脱落が生じているのは遺憾な点である。また、統経解本では江沅の自注が削減されている箇所もあり、それは本稿第3節で述べた「𠄎」の字でも明らかである。

6.3 『説文解字音均表』統経解本への疑問

ここで言及すべきことがあり、それは『説文解字音均表』統経解本について、諧声符の配列や誤字脱字という点をめぐって、疑問を抱く学者も従前存在したことである。『説文解字音均表』上海図書館蔵本は潘1957(21頁)に「説文解字音韻表稿本」として跋文がある。これは蔵書家の潘景鄭が丁丑(1937年)元旦、『説文解字音均表』稿本を購入して書いたものである。

此江子蘭先生『説文解字音韻』稿本。存十六、十七両部、都二卷。全書已刻入『統経解』中、此本猶是先生手筆。

これは江子蘭先生『説文解字音均表』稿本である。第十六、十七両部のみ現存し、全二卷。全書はすでに統経解本に入っているが、本書は先生の手筆のようである。

この『説文解字音均表』には江沅の孫・江文煒の跋文があり、潘氏はそれを受けて、次のように言う²⁵⁾。

此本雖非全帙、当募刊時、既以此本為号呼者、惜未有所成、至刻入『経解』中、其間訛奪益復不可勝計矣。

本書は全帙ではないが、刊行を募った時、大いに呼びかけたが、惜しいことに刊行されず、統経解本に入ったところ、その間誤字脱字がますます多くなってしまった。

「訛奪」とは、例えば潘氏が次のように指摘する例であろう。

取『経解』本略校一過、文字移易处甚多：如『婿』字、稿本在卷首、而『経解』本移在『企』字下、其後來伝刻之誤、可概見也。

統経解本をちょっと校訂してみると、文字が移動している箇所がとても多い。例えば「婿」字は稿本では卷首(第16部の最初)にあるが、統経解本では「企」の字の次に移しており、後々の伝刻の誤りは、概見できる。

「婿」字は『説文解字』第一篇上にあり、『説文解字音均表』の配列が『説文解字』の順であ

れば、第16部の最初に来るのである。文字の配列は人為的に並べ替えたのであろうから、「伝刻の誤り」は厳格すぎる指摘である。ただ、稿本から見て統経解本には何か疑問を生じる要素があることは確かである。統経解本は蘇州図書館蔵本を底本にして、改編をも含む校訂があったことが本稿でわかり、以上のような疑問も解けたに違いない。

6.4 『説文解字音均表』中山大学図書館蔵本

なお、中山大学（広州）図書館にも『説文解字音均表』抄本があり、筆写した者や所有者の蔵書印や署名もない。表紙もなく、紐で一、二か所止めてあるものが4冊ある。段玉裁「『説文解字音均表』序」から始まり、第1部から第7部までで、全部揃っていない。諧声符の配列は統経解本に同じである。1行につき25字で、統経解本やその石印本²⁶⁾の1行につき24字と合わない。また、用紙はます目が印刷してあり、「25×24=600」と算用数字で記され、清末の紙とは言い難い。『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本との関連は未詳である。

7. おわりに

『説文解字音均表』は統経解本が一般的に流布しており、20世紀（1974年）になって清稿本の影印本が出版された。統経解本と清稿本を比較してみると、諧声符の配列が異なっていることは一目瞭然である。どちらが『説文解字音均表』本来の配列であるのか、それについて論じるには従来資料が不足していた。蘇州図書館蔵の『説文解字音均表』を調べることによって、統経解本編纂の状況もわかり、『説文解字音均表』の本来の配列とは、『説文解字』の順であり、それは清稿本における配列である。現存の上海図書館蔵本、北京大学図書館蔵本とも、清稿本と同じく『説文解字』の順である。

統経解本の配列は本来の順とは異なる。『説文解字』の順に配列されていた諧声符を配列替えしたのは、雷浚であると考えことに間違いはなく、雷氏が底本としたのは蘇州図書館蔵本である。これは本稿第5節「『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本」で述べたことから明らかである。統経解本は一篆一行本であり、ほぼ段玉裁「古十七部諧声表」の順でもあり、検索の点からは便利である。とりわけ刊行して世に出したことは重要である。ただ、並べ替えの段階で諧声符の脱落も生じ、江沅の注も削減となっていることがあり、欠点もないとは言えない。『説文解字音均表』統経解本は江沅著、雷浚は諧声符の配列替えという点では改編まで行っているのであるが、それを確認したうえで、雷浚校訂とみなせば、『説文解字音均表』の他のテキスト、具体的には清稿本、上海図書館蔵本、北京大学図書館蔵本との相違が明確となる。

最後に、結論をまとめると、『説文解字音均表』の本来の配列は『説文解字』の順であり、

江沅の弟子・雷浚は『説文解字音均表』蘇州図書館蔵本を底本として、諧声符の配列替えも含めた校訂を行い、それが『皇清経解統編』に収められたのである。

注

- 1) その他のテキストについては白田2016(29-30頁)で述べたが、本稿でも言及する。
- 2) 『説文解字音均表』統経解本で彘音と頼音が脱落していることは、頼・説文会1983(120頁)においても指摘されている。なお、倉石武四郎氏は『説文解字音均表』(倉石文庫)に、「某音」という表示がない場合、書入れしている。
- 3) 橋本2002は『説文解字音均表』に見える両見字について、丹念に研究を行っている。
- 4) 黄1996(3頁,注11)は次のように述べる。「近人潘景鄭氏嘗取二本校誦之,以為経解本訛奪移易之処甚多,殆不可據,説詳〈著硯樓書跋尾〉,故本文之論江氏『音韻表』,一以清稿本為準,而於経解本蓋無取焉;」。文中の「二本」とは『説文解字音均表』の上海図書館蔵本と統経解本である。潘景鄭が見た稿本は第16部・第17部しかないものであり(潘1957,21頁「説文解字音韻表稿本」),これが上海図書館に所蔵されている。本稿6.3節で言及する。
- 5) 黄1996(3-4頁)は『説文解字音均表』「璫」の江沅注を解釈しているが、拙稿ではそれとは異なる解釈もしている。
- 6) 『説文解字音均表』統経解本(第一部・璫)も「王」に作る。段注(一上・39a)は「王」ではなく、「玉」に作るので、本稿でも「玉」で訳した。なお、段注は段玉裁『説文解字注』のことで、以下同様。
- 7) 「絲」の段注は十三上・40aに見える。
- 8) 「璫」の段注については、頼1969(99-100頁)の訳を参考にした。「車笎(くるまのちりよけ)の間にある皮の匣(はこ)である。」「古は使者は玉を奉じた。それを積むためのものである。」担当は磯安代氏。
- 9) 段玉裁は「璫」の説解を「車笎間皮匣也。」とし、注で「也」字依『玉篇』補。と言う。『玉篇』(沢存堂本。卷一,玉部第八)には「『説文』云,“車笎間皮篋。古者使奉玉所以盛之。”」とあり、「也」字が見えず、『説文解字段注攷正』も『玉篇』亦無“也”字。」と指摘する。念のため『玉篇』曹棟亭本まで閲覧したが、沢存堂本と同じであった。「也」字のある『玉篇』が存在することについては疑問に思う。『広韻』(沢存堂本)であれば、「璫,車笎間皮篋也。」(入声・屋韻。小韻首字は「伏」)に作り、「也」字があるが、『説文』とは言っていない。「也」字があった方が文章として整うに違いない。段玉裁は大徐本「古者使奉玉,以藏之。」を『玉篇』によって「古者使奉玉所以盛之。」に改めていて、「也」字についても『玉篇』を根拠にしたかったのかもしれない。なお、尾崎1981(173頁)、「璫」の注(9)には「『玉篇』は『広韻』の誤りか。」とあり、参考になる。担当は阿辻哲次氏。
- 10) 「服」は『説文解字音均表』第1部に属す。「服」の段注(八下・6b)も参照。
- 11) 「者」字は統経解本にはないので、文意から判断して、省略して訳してみた。
- 12) 「建首」は『説文解字』十五篇下に「其建首也。立一為崑。」(段注十五下・1b)とあり、本来部首を指す。『説文解字音均表』では諧声符ごとに文字を配列するので、ここでは諧声符のことである。C-3に見える「建首」も同じ。

- 13) 黄1996(4頁)の挙げる舟声と朝声の例が妥当である。朝音(朝声)は『説文解字音均表』第2部(説文会1994の番号は0149A)、舟音(舟声)は第3部(説文会1994の番号は0175A)で、「朝」字も含まれている。黄氏の原文は以下の通り。「舟声、舟在三部、而朝在二部、則江氏乃於二部列朝字為声首、並於三部舟声下亦駢列朝字是也。」
- 14) 雷浚『説文解字音均表』跋』による。白田2016(28頁)に原文と訳を掲載。その(一)から(四)までを参照。
- 15) 『国朝書画家筆録』巻四に「費念慈、字杞懷、武進人。光緒己丑進士、授編脩。」とある。光緒己丑は1889年。
- 16) 原文は次の通りである。「鑑於阮刻『経解』校勘之経験、王氏刊刻『統経解』、於此一事、謀之更密、每卷皆由二人初、覆校而成、且『校讎者多性堅忍任事』。」
- 17) 雷浚を「雷璿」に作るが、ミスプリに違いない。
- 18) 中国古籍善本書目編輯委員会1986の対象になっておらず、2018年11月ウェブ上の「全国古籍普查登記基本数拠庫」を検索して結果、存在がわかった。
<http://202.96.31.78/xlsworkbench/publish>
- 19) 『蘇州府志』巻八十四「人物十一 吳県」に江沅の伝記があり、巻九十「人物十七 元和県」に江声の伝記があり、その末尾に江謬の名が見える。なお、江沅の父・謬の貫籍については江沅「先府君行略」(江沅『染香齋文集』巻下、『江先生詩古文詞遺集』所収)では特に記されていない。
- 20) ここでは当時の蘇州府を指すのか。
- 21) 『小学類篇』に『説文釈例』が取められているが、江沅の貫籍は元和となっている。この『小学類篇』には江声『六書説』も見えるが、貫籍は元和である。
- 22) 趙2018に許榘と他の学者との交流について書かれているが、許榘と江沅の交流については詳しくはない。
- 23) 『統経解本を清稿本でしっかり校正』したものが説文会1994である。
- 24) 『説文釈例・釈音例』と『説文解字音均表』の比較は、白田1996と白田1997で行った。段玉裁『古十七部諧声表』と『説文釈例・釈音例』『説文解字音均表』の諧声符を対照した表も作成したが、公表していない。また、黄智明1996(3頁、注11)は「按経解本之順序殆與段氏〈古十七部諧声表〉及江氏《説文釈例》同。」(按ずるに経解本の順序はほとんど段氏「古十七部諧声表」及び江氏『説文釈例』と同じである。)と言う。
- 25) 潘1957(21頁)の引用する江文煒の跋は「先生以三十年之精力、得成此編、欲募刊而罕有顧問者、因出篋中所存録副、未竟者数卷、先出以問諸当世。」である。注4)も参照されたい。なお、江文煒については調査中である。
- 26) 『説文解字音均表』統経解本の石印本は、巻首を除いて、半葉が三段組で、1行の字数は統経解本と同じ24字であるが、一段に統経解本の二葉半に相当する33行が配置されている。

参考文献

〈日本語参考文献〉 五十音順

- 白田真佐子1996.「江沅『説文釈例・釈音例』の初声について —『説文解字音均表』との比較を中心に—」,『お茶の水女子大学中国文学会報』,第15号,(左)59-75頁。
- 1997.「江沅『説文釈例・釈音例』の初声の配列 —『説文解字音均表』への発展」,『お茶の水女子大学人文科学紀要』,第50巻,121-137頁。
- 2016.「江沅『説文解字音均表』の成書と刊行」,『文学論叢』(愛知大学人文社会学研究所),第153輯,23-35頁。
- 尾崎雄二郎1981.『訓読 説文解字注』金冊,東海大学出版会。
- 説文会(編)1994.『江沅説文解字音均表攷正』(お茶の水女子大学中国文学研究室)。
- 橋本明子2002.『「説文解字音均表」にみえる両見字についての考察』,お茶の水女子大学卒業論文(平成14年3月卒業)。
- 頼惟勤(編)1969.『大学院読書録・「説文解字注」第一篇上』,お茶の水女子大学中国文学研究室。
- 頼惟勤・説文会1983.『説文入門』,大修館書店。

〈中国語参考文献〉 中国語発音順

- 国家図書館特蔵部1996.『国家図書館善本書志初稿 経部』,天恩出版社。
- 黄智明1996.「江沅『説文解字音均表』与段玉裁「古十七部諧声表」之比較研究」,第五届國際暨第十四届全国声韻学研討会(台湾:新竹師範学院)発表論文。
- 江蘇省蘇州図書館古籍普查登記目録編委会2016.『江蘇省蘇州図書館古籍普查登記目録』,国家図書館出版社。
- 白田真佐子2001.「論江沅『説文解字音均表』和諧声符 —以第9部(東・冬)の最後部分為主—」,『お茶の水女子大学中国文学会報』,第20号(左)16-22頁。
- 2002.「論江沅『説文解字音均表』第4部最後部分的諧声符」,『文学論叢』(愛知大学文学会),第125輯,257-266頁。
- 潘景鄭1957.『著硯樓書跋』,古典文学出版社。
- 虞万里2005.『「正統清経解」編纂考』,阮元・王先謙(編)『清経解 清経解統編』卷,鳳凰出版社,1-28頁。
- 趙成傑2018.「許榘生平学术与清中葉“説文学”之展開」,『社会科学論壇』,72-84頁,2018年第1期。
- 中国古籍善本書目編輯委員会1986.『中国古籍善本書目 経部』,上海古籍出版社。

〈引用文献〉 中国語発音順

- 陳彭年等.『広韻』五卷,沢存堂本(芸文印書館,1976年影印)。
- 陳彭年等.『大広益会玉篇』三十卷,康熙四十三年(1704)吳郡張氏刊本,沢存堂五種之一(東京大学東洋文化研究所蔵)。

- 陳彭年等。『大広益会玉篇』三十卷，康熙四十五年（1706）揚州詩局刊本，曹棟亭五種之一（京都大学人文科学研究所蔵）。
- 寶鎮。『国朝書画家筆録』四卷，宣統三年（1911）蘇州文学山房活字印本。
- 段玉裁。『説文解字注』三十卷『六書音均表』五卷，經韻樓本（上海古籍出版社，1981年影印）。
- 費念慈。『婦牧集』一卷，民国十七年（1928）刻本（上海図書館蔵）。
- 馮桂芬。『説文解字段注考正』十五卷，拋民国十六年（1927）原稿本影印本，台聯国風出版社・中文出版社，1964年。
- 李銘皖等（修），馮桂芬等（纂）。『蘇州府志』一百五十卷『図』一卷『首』三卷，光緒八年（1882）蘇州書局刊本（京都大学人文科学研究所蔵）。
- 江沅。『説文釈例』二卷，『小学類編』所収本（咸豐二年（1852）序刊，『説文釈例』は咸豐元年（1851）刊。華文書局，1970年影印）。
- 。『説文解字音均表』十七卷，台湾：国家図書館蔵稿本。清代稿本百種彙刊本（文海出版社，1974年影印）。
- 。『説文解字音均表』十七卷，『皇清經解統編』本（芸文印書館，1965年影印）。
- 。『説文解字音均表』十七卷，『皇清經解統編』本（東京大学東洋文化研究所蔵倉石文庫）。
- 。『説文解字音均表』十七卷，『皇清經解統編』本（石印本）（光緒18年（1892）刊。東京都立図書館蔵特別買上文庫，小澤景勝旧蔵）。
- 。『説文解字音均表』十七卷，『皇清經解統編』本（石印本）（『清經解 清經解統編』所収本，鳳凰出版社，2005年影印）
- 。『説文解字音均表』十七卷，北京大学図書館蔵稿本。
- 。『説文解字音均表』二卷，上海図書館蔵稿本（江文煒跋）。『統修四庫全書』247，上海古籍出版社，2002年。
- 。『説文解字音韻表』十七卷，蘇州図書館蔵清抄本。
- 。『説文解字音均表』六卷，中山大学（広州）図書館蔵抄本。
- 。『江先生詩古文詞遺集』七卷，『清代詩文集彙編』484，上海古籍出版社，2010年。
- 雷浚。『乃有廬雜著』一卷，『清代詩文集彙編』656，上海古籍出版社，2010年。
- 許慎（撰）・徐鉉（校訂）『説文解字』，一篆一行本（北京・中華書局影印，2002年）。
- 。『江氏説文解字音韻表目』，一卷，蘇州図書館蔵清抄本。